

ワールド ウッドトレンド

No. 11, 22 Feb 2016

欧州における製材品の消費量及び輸出価格

本レポートは、FAOSTAT のデータに基づき、欧州の主要森林国であるオーストリア、フィンランド、フランス、ドイツ、スウェーデンの製材品（針葉樹、広葉樹）の消費量（1961年～2014年）及び輸出価格（1997年～2014年）を概観した。本文でいう消費量は、生産量－輸出量+輸入量で算出したものであり、在庫変動は含まない。また、輸出価格は、総輸出額を総輸出量で除算して得られた指標である。

1. 製材品の消費量

オーストリア

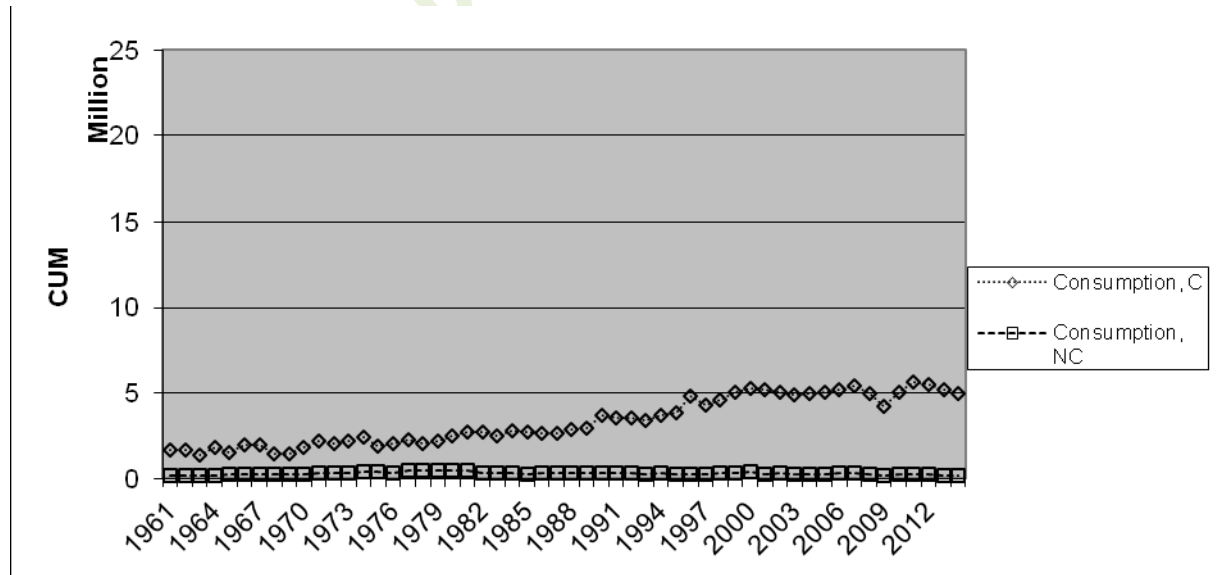


図1. オーストリアにおける針葉樹、広葉樹製材品の消費量（1961-2014年）

Source: FAOSTAT

図1が示すとおり、オーストリアの針葉樹製材品の消費は1990年代末まで増加しているが、その後横ばいで推移している。また、広葉樹製材品の消費量は非常に少ない。

フィンランド

フィンランドでは、図2に示すよおり、1990年代初めまでほとんど増えていないが、90年後半から金融危機までは増えている。しかし、危機後の回復はあまりない。広葉樹製材品の消費量は非常に少ない。

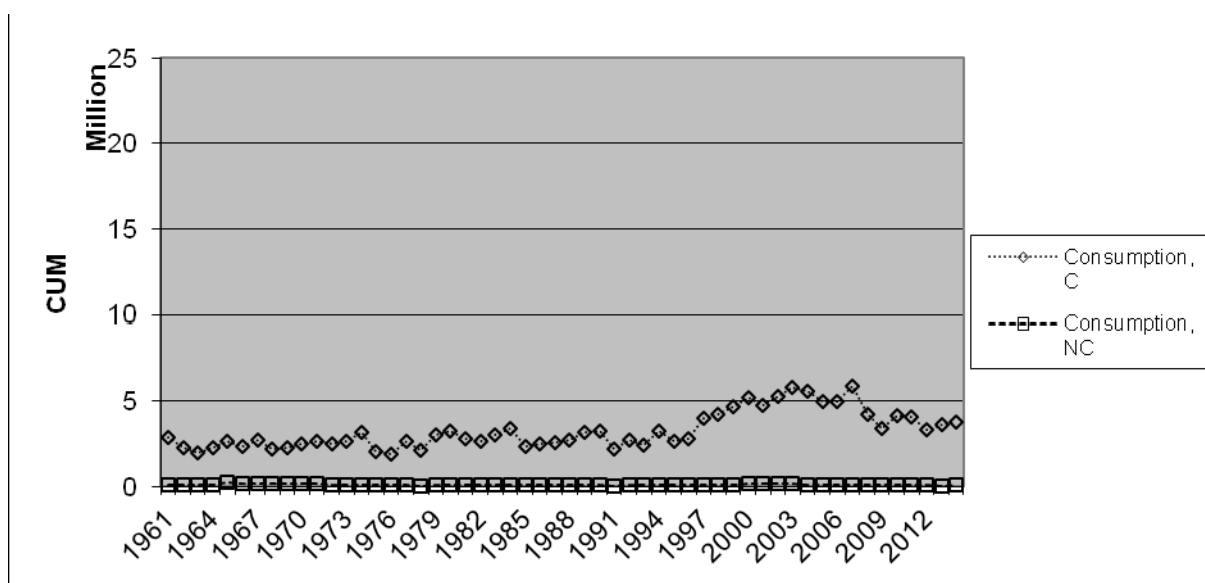


図2. フィンランドにおける針葉樹、広葉樹製材品の消費量（1961-2014年）

Source: FAOSTAT

フランス

フランスの針葉樹製材品は増加傾向にある（図3）。消費量は1961年に約500万m³であったが、経済の景気減速による落差があるものの、2014年には800万m³になった。フランスはオーストリア、フィンランド、ドイツ、スウェーデンと違い、唯一広葉樹の製材品の消費と生産がある国である。しかし、1970年代半ばからその消費量は減少傾向にある。

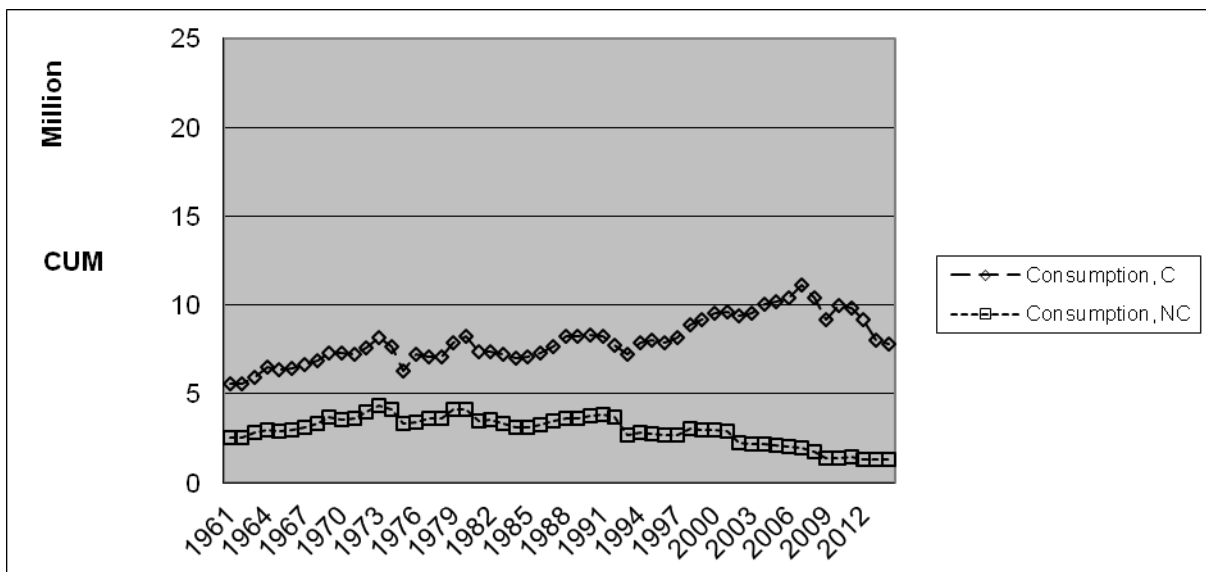


図 3. フランスにおける針葉樹、広葉樹製材品の消費量（1961-2014年）

Source: FAOSTAT

ドイツ

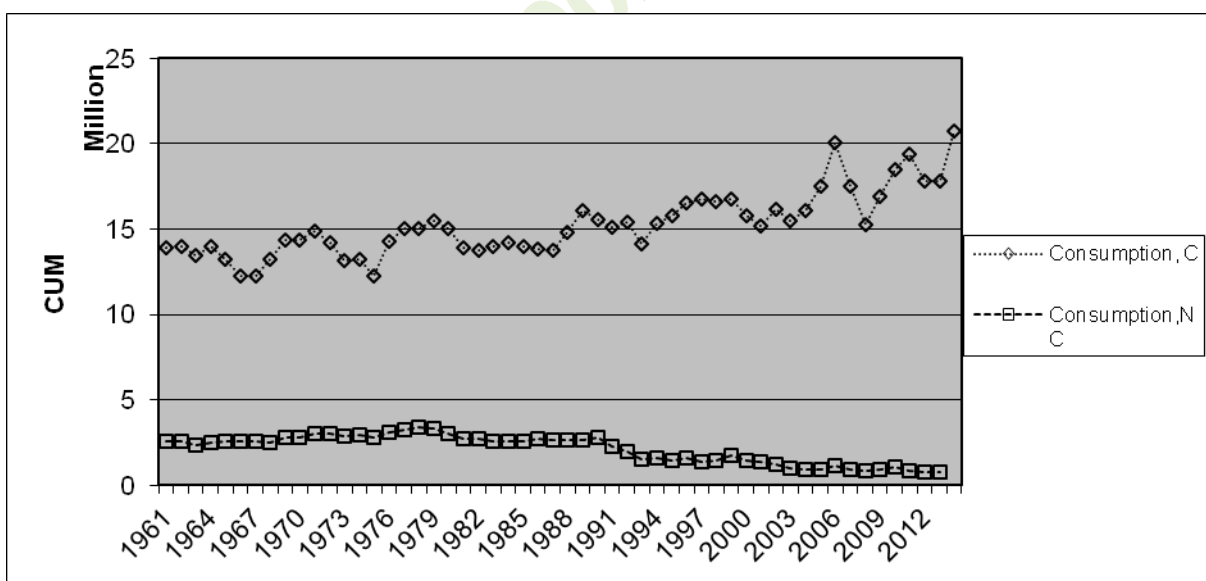


図 4. ドイツにおける針葉樹、広葉樹製材品の消費量（1961-2014年）

Source: FAOSTAT

ドイツは、針葉樹製材品の消費量が他国と比較して大きく、増加傾向をたどっている。これは、消費者の人口が多いことを背景にある。また、図 4 に示す

消費量の変動により景気サイクルが読み取れる。金融危機の影響はあるものの、本文に取り上げられたその他の4カ国と比較して消費回復が早く、危機以前の水準を保っている。理由はやはりドイツの強力な経済によるものであろう。広葉樹の製材品は1980年までは増加傾向にあるが、それ以後は減少傾向にある。

スウェーデン

1961年～2014年におけるスウェーデンの製材品消費量は安定しているが、経済サイクルによって波がある。(図5)。広葉樹の製材品消費量は非常に少ない。スウェーデンも他国同様、針葉樹の国であり、更にフィンランド同様、針葉樹製材品の輸出国である。

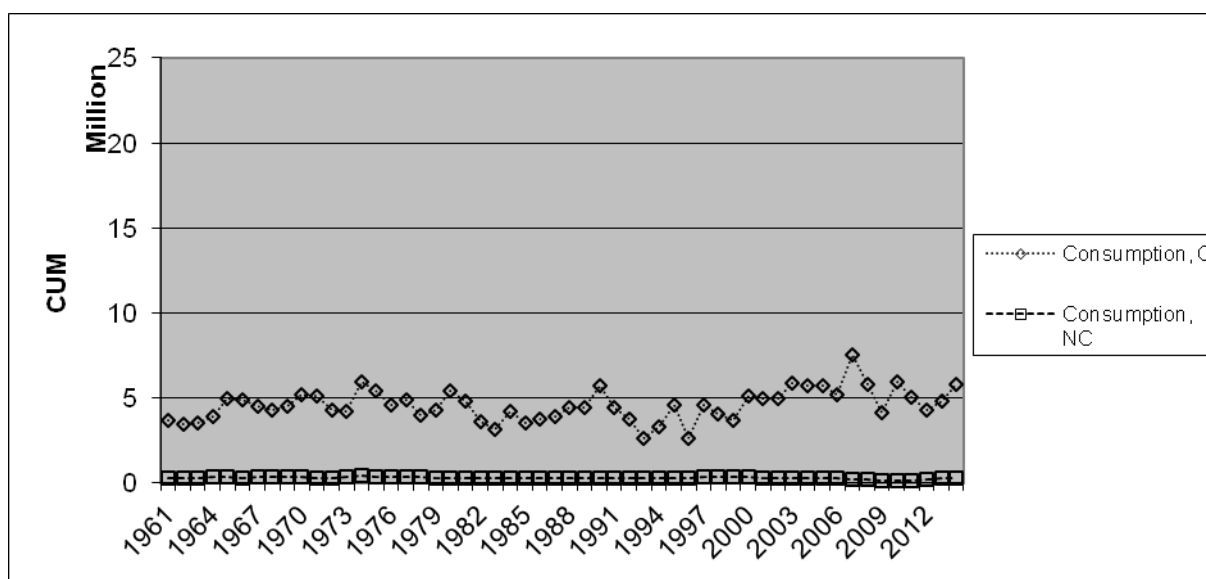


図 5. スウェーデンにおける針葉樹、広葉樹製材品の消費量 (1961-2014年)

Source: FAOSTAT

2. 製材品の輸出価格

図6は、オーストリア、フィンランド、フランス、ドイツ、スウェーデンの針葉樹製材品の輸出価格を示す。全体の傾向としては、5カ国の輸出価格は似通っており、それほどの違いはない。フィンランドとスウェーデンが高く、オーストリアとドイツが続き、最後がフランスである。なお、このような比較からの結論には、樹種（スプルース、マツ）や製品の品質が考慮されていない。しかし、図6に示すように、輸出価格の変動から景気の変動は見て取れる。

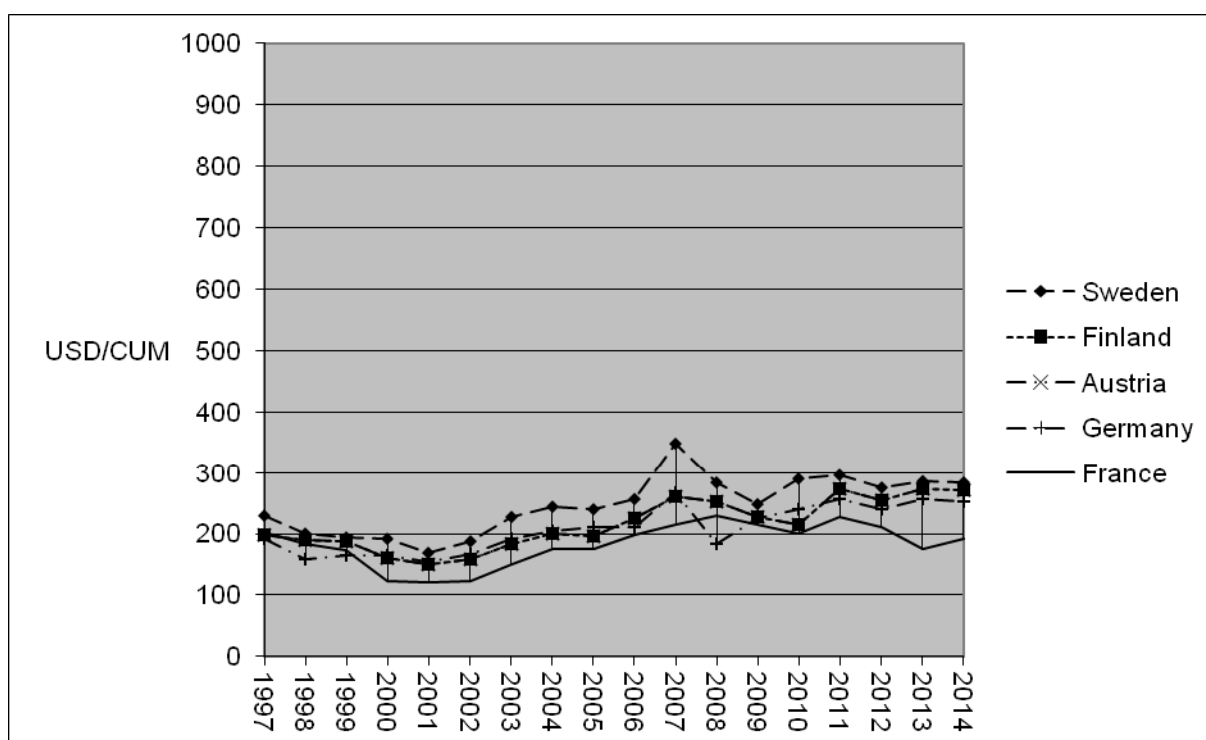


図6. 5カ国(オーストリア、フィンランド、フランス、ドイツ、スウェーデン)における針葉樹の輸出価格(1997年-2014年)

Source: FAOSTAT

広葉樹の製材品の輸出価格の国別比較を図7に示す。傾向はかなり異なる。これは主に樹種とその品質によるのだろう。オーク、ブナはカバより高価である。フランスは他の4カ国より広葉樹材を輸出している。輸出価格の相違のもう一つの理由はフィンランドとスウェーデンといった少ない量の国では、ある樹種の少量の違いでも相対的な効果がある。

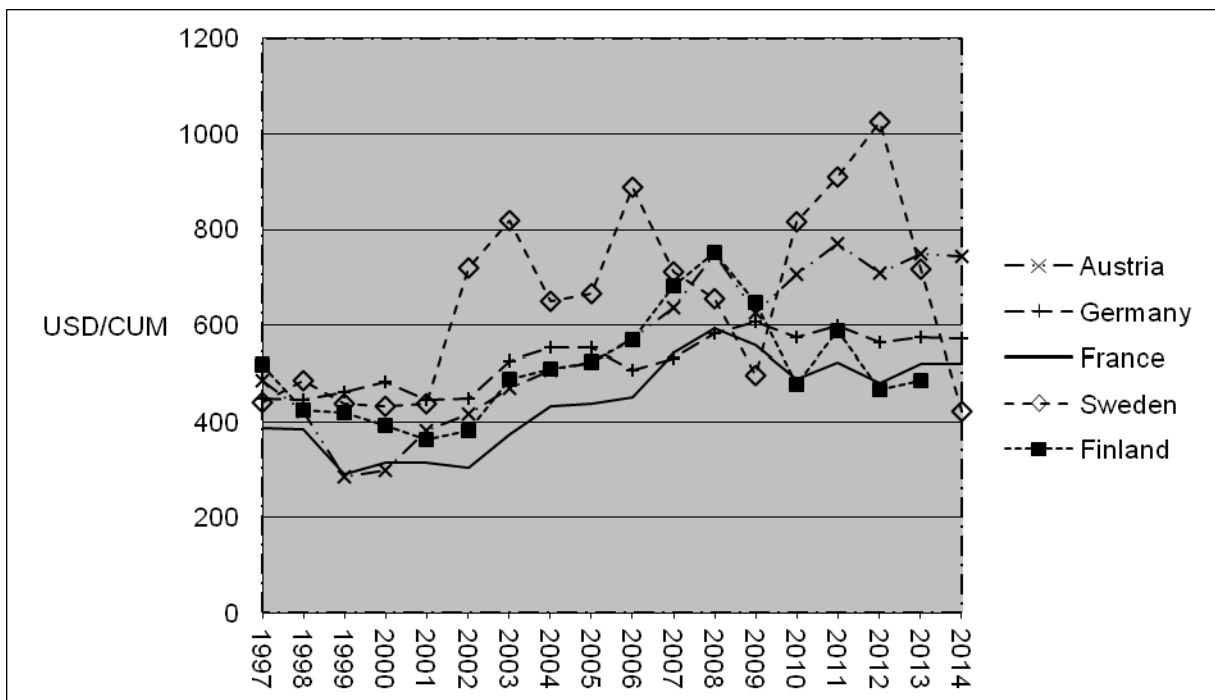


図7. 5カ国(オーストリア、フィンランド、フランス、ドイツ、スウェーデン)における広葉樹の輸出価格(1997年-2014年.)

Source: FAOSTAT

3. まとめ

オーストリア、フィンランド、フランス、ドイツ、スウェーデンの5カ国において、針葉樹消費量は2010年頃の金融危機まで増加傾向にある。ドイツは唯一例外として、増加し続けている。人口の規模を考慮すると、5カ国の間でドイツの針葉樹製材品の消費量が最も高いのは驚くことではない。オーストリア、フィンランド、スウェーデンは、比較的人口規模が小さいが森林は豊富である。消費量は生産量よりはるかに小さい。フランスにおける広葉樹製材品の消費量も決して多くはないが、他国より高い。

5カ国の針葉樹製材品の輸出価格の変動傾向は類似している。広葉樹製材品の輸出価格は様々で、2000年初めから2008年まで増加傾向は顕著である。

製材品の今後の消費動向は、建設業者や家具メーカーといった需要に大きく左右されるなか、失業率、消費者物価指数、収入、住宅ローン金利、住宅価格、住宅着工件数、住宅建築許可件数などの指標は注目される。

欧州では、失業率が約 10%と高いが、最近徐々に回復に向かっている経済の発展により、失業状況が改善されると期待している。しかし、世界的な不安定要因が経済発展に影響を与えつつある。失業率は移民問題の影響も受ける。昨年、欧州（人口 5 億）に向かった移民の数は百万人以上で、2016 年は更に増加するだろう。移民が労働市場に統合されるまでにはそれなりの時間がかかるだろう。

消費者物価指数 は、何年も低下している。欧州中央銀行の主な目標の一つがインフレを少なくとも 2%まで増加させることであるが、今現在達成していない。

収入は経済および生産高とリンクしている。インフレ率の増加の一手段としては、賃金の増加である。スウェーデンでは、中央銀行がそう望んでいるが、雇用主が反対しているのは明白である。

住宅ローン金利は家計とどれだけ消費できるかにかかわってくる。同じ EU 共同体のメンバーでも住宅市場の状況は大きく異なる。スウェーデンでは、現在のところ影響は軽微である。しかし、低金利により、住宅価格が実質的に上昇する懸念はある。上昇した住宅ローン金利は住宅価格上昇を減速させる手段となる。スウェーデンでは起こりうる可能性が高い。

数年にわたり、移民等により、住宅許可件数と住宅着工数が実質的に増加する可能性がある。しかし、需給と供給の隔たりが解消されるには何年も要するだろう。欧州では北欧以外の国々の主導により、より多くの木材使用を呼びかけるキャンペーンが行われている。また、人々の間で木材が他のどの部材より環境にやさしいとの認知が広がることにより、建築用の製材品の利用増加は期待されるだろう。

(本文は現地レポートを基に編集したもの)